

〔報告〕 第 33 回歴史地震研究会参加記—未来へ残す記録と復興—

名古屋大学減災連携研究センター 中井 春香

§ 1. はじめに

2016 年 9 月 11 日(日)から 13 日(火)の 3 日間にわたって、東日本大震災の被災地である岩手県上閉伊郡大槌町において、第 33 回歴史地震研究会(大槌大会)が開催された。研究発表会は、大槌町の南部に位置する城山にある大槌町中央公民館大会議室で行われた。震災当時は避難所としても用いられた施設でもある。また 2 日目には、津波が 3 階まで到達するなどの被災後に再興された三陸花ホテルはまぎくにて懇親会が実施され、被災の現実と復興を感じる研究会であった。筆者自身、東日本大震災の被災地へ訪れるのは初めてであり、5 年半を経た現地の今、そして課題を改めて考える機会となった。参加記では、特に印象に残った、虎舞やワークショップ、巡検について思いを巡らせながら述べたいと感じる。

§ 2. 虎舞に込められた復興

ワークショップの開催に伴い、地域の伝統芸能である虎舞の鑑賞が最初に行われた。虎舞とは、二人一組になって虎頭に入り、太鼓や笛、威勢のいい掛け声に合わせてとんだり跳ねたりする伝統芸能である。語り継がれている起源は、江戸時代中期、三陸の吉里吉里善兵衛こと前川善兵衛が持つ数艘の大型廻船の船方達が、当時江戸で大流行していた近松門左衛門の浄瑠璃「国姓爺合戦」を見物し、劇中の一場面「千里ヶ竹」の和籐内虎退治の場面を舞踊化したという説があるそうである。大槌町の虎舞には、安渡虎舞、吉里吉里虎舞、向川原虎舞、陸中弁天虎舞、城山虎舞の 5 団体があり、その全ての団体がそれぞれの個性を持った虎舞を踊るとされる。安渡虎舞、吉里吉里虎舞は、先に紹介した和籐内の虎退治を踊りの中に取り入れており、浄瑠璃「国姓爺合戦」の流れを汲んでいると言われている。このように歴史を感じさせる虎舞を踊り、平成 11 年には町の無形文化財に指定されている。虎の生態を繊細に踊りに表した芸風が特徴で、「跳ね虎」「笹ばみ」などの演目があり、吉里吉里虎舞による演舞が 30 分に亘って行われた。演者の中には、震災後に生まれた 3 歳ほどの小さな子供も含まれ、小学生から大人にわたる総勢 20 名ほどの保存会の皆様によって演舞が行われた。時にはゆっくりと、時には前方に設置された笹を揺らしながら迫りくる姿はまさに圧巻。クライマック

スには虎と青年が一騎打ちをして虎をとる。その際に「大槌町の復興の証とする」と唱え掲げられた左手には、この地域を将来率いていくであろう子どもたちの頼もしさを感じると同時に、地域復興への力を感じた。力強いリズムと迫力満点の演舞に研究会の参加者からは溢れるばかりの拍手が送られた。



写真 1 笹を揺らす虎舞

§ 3. 津波アーカイブのワークショップ

本年度は過去の大会のような公開講演会ではなく、「大槌町津波アーカイブに向けたワークショップ」と題し、研究会参加者と住民が同じテーブルについて話し合うワークショップが開催された。6 グループに分かれて行われ、各チームに住民の方とコーディネーターが同席する形式で進められた。大槌町役場や東北大学の先生からの貴重な講演を間に挟みながら「津波アーカイブ」について話し合う内容であった。筆者のグループには住民の方がいらっしやなかったが、メディアや理工系、文系の研究者が様々な角度から意見を出し合った。どのように残すのかは大変難しい課題であるが、地域で学ぶ生涯教育の場としての役割を担う公民館や、地域の未来を支える子どもやその両親である働き世代を巻き込む学校教育の場の双方向からのアプローチが必要ではないかという意見で一致した。また講演で紹介いただいた字(あざ)単位で博物館を年に 1 度開催する事例のように、住民が主体的に「やる気」を持って継続的に実施していける仕組みも重要となると感じた。特に、虎舞で感じた伝統芸能や祭りのように代々伝わっていく背景には、幼少期から五感で感じ、「やってみたい、かっこいい」といった憧れの感情から来ているように感じ、このような感覚からくるアーカイブの仕組みがあると良いのではないかと思う。

津波アーカイブの真の目的である「震災を忘れずに伝え、より多くの人々の命を守ること」を実現するためには、日常的に人が集まる場所で、尚且つ活用され多くの人の記憶に残り、必ず思い出される手法がある。過去の人々が残した、石碑や伝承、歌のように、本当に次の100年後に残るアーカイブとはいったい何なのかを考えさせられる貴重な時間であった。

§ 4. 巡検で見た復興の記憶

3日目の巡検の日はあいにくの雨のち曇りであったが、多くの被災地を巡ることができた。城山公園は高台に位置し、大槌町の沿岸部を望むことができる。現在沿岸部では約5mの盛土工事が進んでいる。その中には窪んでいる部分がある。そこは、かつて神社がありそのままの土地の高さで再建する予定であるという。墓石についても同じように、もとの高さで建っているものがあった。自治体としては、土地所有者が5年の歳月を経たことで三分の一の住民が戻って来ない可能性があるといった課題がある。



写真2 蓬莱島の希望の燈台

次に訪れた小枕集落や安渡集落は津波で大きな被害を受けた地域である。現在大槌町では、14.5mの防潮堤の建設を進めている。小枕集落は防潮堤の外側となることが確定している。防潮堤についても海が見えなくなるなど様々な意見があるが、住民のかたの意見を優先した策が打たれていくのであろう。旧三陸線の線路の一部が残っており、当時の景色を思わせるものであった。現在復旧の計画があるそうであるが時間をかけて行われる見通しである。赤浜集落には、ひょうたん形の島で、『ひょっこりひょうたん島』のモデルになったとされる蓬莱島がある。震災時には、津波で燈台が押し流され現在は希望の燈台として新たな燈台が建設されている。巡検では島にも上陸し復興記念碑などを見学した。

午後は、天照御祖神社にて住職のお話をお聞きした。神社は高台に位置し、その境内へ続く階段の地面

から3mほどの部分は津波で流されたという。社内に掲示されていた「あの日、なぜ津波からこの神社は残ったのか？」と書かれたポスターが印象に残った。神社は高台に立地することも多く、津波被災地ではそのぎりぎりまで津波が押し寄せたが残っている寺社が多いようにも感じた。これも過去からのメッセージだったのだろうか？



写真3 天照御祖神社にてご住職のお話

吉里吉里上通りの金毘羅神社には昭和三陸津波の石碑がある。神社の周辺は昭和三陸津波の後に盛土が行われた地域であり、その背景から逃げ遅れた人がいたと聞いた。盛土をしても津波から避難することは重要であり、今5mの盛土を実施している地域でも同じことを繰り返さないために、盛土をして被害を軽減することはできても決して津波が来ないという意味ではないことを伝えていく必要があると感じた。

最後に訪れた伝統家屋を今も受け継がれている北田家では、東日本大震災時に自主的に家を避難所として開放された体験をお聞きした。各地でこういった助け合いが行われた背景には、地域の住民が祭りなどを通して普段から交流を深め信頼関係を築いていたことも重要であったように感じる。地域の伝統を守る活動やその日常的なつながりが、非常時である災害時に発揮されることを実感した。

§ 5. おわりに

今回初めて被災地を訪れた。そこには、震災の傷跡や歴史が今も残っていた。しかし、今回訪問をしてそれ以上に強く感じたのは地域の人たちの復興を目指す熱い想いと、生きた記録と記憶であった。虎舞演舞の最後、復興を願い力強く掲げられた子供たちの左手に、輝く未来の希望を感じ、その凜とした声がいっまでも私の心に響いている。

最後になりますが、第33回歴史地震研究会の準備、運営に携わられた皆様に、ここに記して感謝申し上げます。